
appassionato

柊 雪華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

appassionato

【Nコード】

N9171P

【作者名】

柊 雪華

【あらすじ】

「Vocalise」のif的な位置づけにある短編。

「氷点下のピアニスト」との呼び名を持つ英敏は、人とかかわりを酷く嫌っていた。

ある夏の日、音楽室を借り切ってピアノの練習をしていたら、彼が一番苦手としている明るく誰からも愛される少女、真紀が突然音楽室を訪れる……。

三十分の長丁場だった。ベートーヴェンのピアノソナタ・第23番。「熱情」の名で世に知れ渡っている、ピアノ・ソナタの大作である。

一週間後に発表会を控え、滝島英敏はひたすらに、何度も全曲を弾きつづけていた。

しかしその表情は凍りついたようにクールそのもの。「熱情」のカケラさえもなかった。八月の、今年一番の熱帯夜なのにも関わらず。

技巧的に。それ以外は何も考えるな。

とても15歳の少年とは思えない、冷徹極まりない思考で、あの激しい音楽を奏で上げていく。

技巧第一主義の英敏ではあるが、それだけに速度標語や曲想標語には忠実だったため、傍目には情感溢れる演奏に思える。

graveだとかallegroといった簡単なものにいたっては、学生向けの楽譜によく記されている、四部音符にイコールと数字が付されたものがすぐ思い浮かぶし（その数字までも正確に言い当てるほどだ）、martellatoやらgiocosoなどといった、一般にはあまり使われない曲想標語さえ正確に把握している。「人間楽典」「純粹培養音楽少年」「氷点下のピアニスト」…彼を称する言葉はあまりにも多すぎた。

しかし他人との関わりを極度に嫌う彼は、そのように称されることを好まなかった。

……僕は僕であって誰でもない、僕の領域に入ってくるな。

全ての人間を拒絶し、ひたすらに、ベートーヴェンの作り上げた世界に没頭していく、あくまで、冷静さは保って。

ガラッ。

鳴るはずのない、音楽室のドアが開く音。

今日は音楽室の主である教師、坂崎に頼み、放課後の音楽室を貸切にしてもらっていた。

いつもであれば、ここで合唱部の面々が練習していたり、雑誌に花を咲かせているのが常のはず。しかし合唱部の面々は、現在は全日本合唱コンクールの予選のために合宿中であり、ここから目と鼻の先にある合宿所で厳しい練習をしている。

日ごろは人当たりのよい大人の女性である坂崎がその瞳を爛々と輝かせてタクトを振り、部員達もまさに鬼の形相。何故そこまで熱くなる必要があるのか、英敏にはわかりかねたのだが。

ともあれ、夜八時半。こんな時間に用のある生徒などいないはずだ。演奏を中断されたことに静かな怒りをふつふつと沸かせながらも、彼はそのまま演奏を続けようとした、が、そうすることはかなわなかった。

合唱部の生徒が、こちらに近づいてきていたのだ。

「なにか……」

「『熱情』のくせに、随分と冷たい演奏するんだね」

そう言う少女に、英敏は心当たりがあった。林真紀。全国トップクラスの歌唱力を持つ、同学年の合唱部員である。外見は、「美人」と「可愛い」のカテゴリに分けるとすれば「可愛い」部類であり、「本来の音楽家」らしい細やかな気配りと明るい性格で、たくさんの生徒の人気を一身に集めている、英敏とは違った意味で校内の有名な人だった。

そして、英敏の最も苦手とする人物でもあった。彼からすれば、

どうしても彼女が八方美人なだけに思えてしまうのである。

同じ部活の鮎美や茜、そして坂崎、クラスメイトの咲子たちに向ける笑顔も、どことなく能面のようなものを感じていた。もっと違う表情が見たいと常々思っているのに、なかなか彼女はその能面スマイルを崩そうとはしない。

「……用はそれだけ？」

英敏は心底うんざりしたように吐き捨てるが、そこで引くのが真紀ではない。彼女は英敏の不可侵領域にもずかずか足を踏み込ませるような図々しささえも持っていたのだ。

「まさか。私そこまで嫌味じゃないよ。ハーモニーディレクター足りなくなっただけから取りに来ただけ」

「じゃあいちいち邪魔しないでくれるかな」

「邪魔したつもりはないけど？ 単なるアドバイスだよ、ア・ド・バ・イ・ス」

真紀はおどけてみせながら、ハーモニーディレクターと呼ばれる高機能のキーボードをソフトケースに包んでいく。

「僕には僕の演奏があるんだから、それに口を出さないでほしいんだけど」

「ん？ そんなんで、いつもレッスン受けるときどうしてたの？」

「だから……石谷先生のレッスンで僕の演奏を作っていくんだってば。林さんが口を出すことじゃない」

「第三者の意見を聞くことだって、音楽演るには重要だと思うけど？」

真紀の言うことも正論かもしれないが、英敏の耳には需要事項としてインプットされない。八方美人な女の戯言にしか聞こえない。いい加減、こんな不毛な会話を終わらせなかった。

「だいいち、林さんまだ練習してるんじゃないかな？ 早く戻らないと練習にならないよ、ただでさえ君ら少人数なんだから」

「ほんっときついよねー英敏君。そんなに私のこと、嫌いなのか？」

口調は明るいし、微笑みもいつものあの能面のように張り付いた

ようなもの、に思えたが、そうではなかった。唇には僅かに哀しげな笑みが浮かんでいる。彼女のそんな表情など見たことがなかったからかもしれない、少しだけ、英敏の胸が痛んだ。

……今の感情は……？

英敏には、わからなかった。なぜか勝手に頬が熱くなる、そわそわしてしまう。自分の感情の癖に、自分の意のままになろうとはしてくれない。それはとても、厄介な感情だった。

「……嫌いだ」

本当はもっと違うことを言えばよかったのに、上手く言葉が出なくて、こんな酷い発言をしてしまう。平気でしたわけでは、当然ない。

「……っはは、そうだよー。ごめんね」

さっき以上に明るかった真紀の声が、震えた。

「私こんなだから昔っから嫌われ者でさ。英敏君の言うとおり、もっとおとなしくしてればいいのにね」

黒いソフトカバーの持ち手を細い肩で担ぎ上げると、同時に、英敏の耳にも届くほど派手に音がした。ぽたり、と、音楽室のじゅうたんに何かが零れる音が。

真紀は、微笑みながらも、その瞳からうつすらと涙をこぼしていた。

他人と深く関わるのが嫌いな英敏だったから、当然自らの発言で女の子を泣かせるなどということは今までにはない。彼は、もはやいつもの「氷点下のピアニスト」でもなんでもなかった。ただ、ただ不器用な少年でしかなかった。

「本当はね、もう練習終わって、皆交代でお風呂入ってるの。ハモディはここに来るための口実」

「なんでそんなこと……する必要があったのさ」

英敏の声色には、もう冷たいものは感じられなかった。これ以上冷たくする必要がなかったから、したくなかったから。

「まだ、わからない？」

「……だから、君はなにがしたいの？」

やっぱり言葉が上手く選べなくて、言葉そのものはとても冷え切ったものになってしまふ。しかし、真紀が音楽室に入ってきたときよりも、その声色は限りなく温かいものになっていた。

真紀は涙を指先で拭うと、ピアノに陣取っている英敏のもとへと向かった。ハーモニーディレクターは重い。その足取りはどこかおぼつかなかった。

「英敏君、ごめんね」

それだけを、泣き笑いの表情で。

そしてそのまま、真紀は音楽室を立ち去ろうとする、が、英敏がそれを許さなかった。

「……練習、しなきゃ……」

言葉の続きをつむぐのさえ、許してもらえない。

英敏は、真紀の肩から強引にハーモニーディレクターを引き摺り下ろすと、そのまま彼女を引き寄せ、なにがなんだか分からないままがむしゃらに、彼女にくちづけていた。

「練習、しなきゃいけないんだよ……ね？」

「そんな気なくなつたよ。君の泣き顔なんて見せられたら。だから、今日はもう『練習』は終わりにするよ」

「ごめんなさ……」

謝ろうとする真紀の唇を、また、今度は確固たる感情を持つてして、自分の唇で塞いでやる。優しく、限りなく優しく、柔らかな羽根がそつと真紀の唇に舞い降りてくるように。

「ただ、少し付き合ってくれないかな。気が変わった」

眼鏡の向こう、英敏の瞳は、さっきのくちづけと同じぐらい優しくかった。こんな優しい瞳の英敏など見たことがなかった真紀は、なにが起こったのかわからないまま、そして彼に促されるまま、ピアノの右横の床にへたり込む。

—— a p p a s s i o n a t o 。 熱情的に。

その真の意味が理解できた、いや、理解するものでなく、感じるものだと分かった今、英敏にはもう恐れるものは何もなかった。わざわざ「氷点下のピアノリスト」だとかいう肩書きを背負ったまま演奏する理由などなかった。

今の自分の胸に渦巻く全ての感情を、その繊細そうな指先で、鍵盤に叩きつけていく。まだ唇が、熱かった。しかしその唇の熱こそが、彼に「熱情」を教えてくれたのだ。優美な旋律は二度目のキス、激しく鍵盤を叩くときは一度目のキス。

一度目のキスに駆け立てた感情も、二度目の優しいキスも、どちらも「熱情」が引き起こした、奇跡。

英敏が「氷点下のピアノリスト」だなんて不名誉な通称で呼ばれるのを嫌がっている。それは、真紀もよく知っていた。

「今の英敏君は、いunnoなら、『熱情の支配するピアノリスト』だよ」本人には分からないように、そっと呟く。

何度も何度も同じ旋律が繰り返され、そしてピアノソナタ第23番・作品57「熱情」は幕を下ろした。

「やっと分かったよ、『熱情』の意味」

誰ともなしに、いや、たった一人に向けてなのだが恥ずかしいので、そっぽを向いてポツリと英敏が呟いた。

「辞書的な意味じゃない、ちゃんとした意味。分かったよ」

「？」

「君が泣くから、いやでも分かった」

やっぱり、言葉を選べないのは相変わらず。けれど、これからは少しずつ、少しだけ、何かが変わりそうだ。そんな気がした。

「うん。さっきよりよっぽど演奏、よかったよ。本当に『a p p a s s i o n a t o』だったもん」

「違うよ、そっちの熱情じゃなくて、こっちの熱情」

英敏は、自分の白いシャツの胸元に、そつと手を当てた。

「こっちの、熱情……」

「ああああ、もう、まだ分らない？ さっきあれだけキスしたつてのに……」

言いながら恥ずかしくてどうしようもなくなってくるが、もうここまできたら最後まで言わないと収拾もつかない。

「君のことが好きじゃなかったら、あんなことはしない」

「でもさっき、嫌いつて……」

やはり、言い過ぎたか……心底後悔するが、すぐにそのフォローの仕方はわかった。恋だの愛だの騒いでいるクラスメイトたちを冷めた目で見ながらも、しっかりと情報は得ていたのである。

「僕だけしか知らない表情のない君が、嫌いだ」

「英敏君しか知らない表情？」

「君、誰にだって同じ顔で笑ってるじゃないか。僕は……ずっとずつと前から、もっと違う君の表情が見たかったよ。僕しか見られないような表情が、見たかった」

そこでやっと、真紀も何を言われているか理解できたらしい。自分がまいた種は自分で刈り取らねばいけない、そう思っ、真紀もある言葉を口にしようとする。

自分が一番言いたかった言葉、そして、英敏に言っ、ほしい言葉を。

「あのね、英敏君。私……」

「好きだよ、君が。君には絶対先に言わせない」

真紀のまいた種は、英敏が一瞬にして全て刈り取ってしまったのだ。

「……うん。ありがとう」

三度目のキスは、真紀から。震える指で英敏の頬に触れる。熱い。そのまま彼の眼鏡をはずし、ピアノの上へ。

椅子に座ったままの英敏が、少しだけ背をかめると、膝立ちに

なつた真紀とちょうど釣り合いが取れる。

漆黒の艶を放つピアノに、二人の影がそつと重なつた。

（後書き）

友人のサイト開設記念ということで書かせていただいた作品。

Vocaliseのifストーリー。クールな英敏君と明るい真紀ちゃん。正反対。

突貫工事のこの作品を友人に進呈してもいいもんかと迷いましたが、
全ては友人への愛ゆえです（キッパリ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9171p/>

appassionato

2011年1月3日20時40分発行